

あてめ 文章を正しく読み取ろう

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「プロを目ざすのは、もうやめにしなさい。」

祐也より頭ひとつ大きな父が言った。

「二週間後の研修会を最後にして、少し将棋を休むといい。いまのままだと、きみは取り返しのないことになる。わかったね？」

「はい。」

そう答えた祐也の目から涙が流れた。足が止まり、あふれた涙が頬をつたって、地面にほとほと落ちていく。胸がわななき、祐也はしゃくりあげた。こんなふうに泣くのは、保育園の年少組以来だ。身も世もなく泣きじゃくるうちに、ずっと頭をおおっていたモヤが晴れていくのがわかった。

「将棋をやめると言っているんじゃない。将棋は、一生をかけて、指していけばいい。しかし、おとしの十月に研修会に入ってから、きみはあきらかにおかしかった。おとうさんも、おかあさんも、気づいてはいいたんだが、将棋については、素人同然だから、どうやってとめていいか、わからなかった。二年と二カ月、よくがんばった。今日まで、ひとりですませて、申しわけなかった。」

父が頭をさげた。

「そんなことはない。」

祐也は首を横にふった。

「たぶん、きみは、秀也が国立大学の医学部に現役合格したことで、相当なプレッシャーを感じていたんだろう。」

父はそれから、ひとの成長のペースは なのだから、あわてる必要はないという意味の話をした。

千駄ヶ谷駅で総武線に乗ってからも、父は、世間の誰もが感心したり、褒めそやしたりする能力だけが人間の可能性ではないのだということをわかりやすく話してくれた。

「すぐには気持ち切り換えられないだろうが、まだ中学一年生の十二月なんだから、いくらでも挽回はきく。高校は、偏差値よりも、将棋部があるかどうかで選ぶといい。そして、自分なりの将棋の楽しみかたを見つけたらいい。」

ありがたい話だと思ったが、祐也はしだいに眠たくなってきた。錦糸町駅で乗り換えた東京メトロ半蔵門線のシートにすわるなり、祐也は眠りに落ちた。

午後六時すぎに家に着くと、玄關で母がむかえてくれた。

「祐ちゃん、お帰りなさい。お風呂が沸いているから、そのまま入ったら。」

いつもどおり、張り切った声で話す母に、 祐也は顔がほころんだ。

浴槽につかっているあいだも、夕飯のあいだも、祐也は何度も眠りかけた。二年と二カ月、研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たかった。

悲しみにおそわれたのは、ベッドに入ってからだ。

「もう、棋士にはなれないんだ。」

祐也の目から涙があふれた。布団をかぶって泣いているうちに眠ってしまい、ふと目をさますと夜中の一時すぎだった。父と母も眠っているらしく、家のなかには物音ひとつしなかった。

常夜灯がついた部屋で、ヘッドのうえに正座をすると、祐也は将棋をおぼえてからの日々を思い返

した。米村君はどうしているだろう。中学受験をして都内の私立に進んでしまったが、いまでも将棋を指しているだろうか。いつか野崎君と、どんな気持ちで研修会に通っていたのかを話してみたい。

祐也は、頭のなかで今日の四局を並べ直した。どれもひどい将棋だと思っていたが、一局目と二局目はミスをしたところで正しく指していれば、優勢に持ち込めたことがわかった。

「おれは将棋が好きだ。プロにはなれなかったけど、それでも将棋が好きだ。」

うそ偽りのない思いにからだをふるわせながら、祐也はベッドに横になり、深い眠りに落ちていった。

一 文中 に当てはまる四字熟語として、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

- ア 一朝一夕
- イ 一日千秋
- ウ 千差万別
- エ 千載一遇

二 文中下線部 「父が頭をさげた」とありますが、「祐也」に対して「父」が頭をさげたのはどうしてですか。次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

- ア 祐也が将棋を続けるという道を閉ざすことになったため。
- イ 祐也の状況を見ていながら何もしてあげられなかったため。
- ウ 祐也の気持ちを考慮せずに勉強を強要することになったため。
- エ 祐也の夢の実現よりも兄の秀也のことを第一に考えていたため。

三 文中下線部 「祐也は顔がほころんだ」とありますが、この時の「祐也」の気持ちとして、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

- ア 明るく振る舞う母の様子を見て心が和らぐ気持ち。
- イ 無理をして自分を励まそうとする母に同乗する気持ち。
- ウ 自分の心情を察してくれない母に対してあきれを感じる気持ち。
- エ 自分を子供扱いする母の態度に照れくささを感じる気持ち。

振り返り

一

二

三